

転移修飾 (Transferred Epithet) に関する 言語学的考察

— 文体論から語用論及び認知意味論へ —

大 森 裕 實

A Linguistic Approach to Transferred Epithet: from Stylistics to Pragmatics and Cognitive Semantics

Yujitsu OHMORI

The aim of the present paper is to explain the matter of transferred epithets not within a traditional stylistic scope but from the contemporary viewpoints of pragmatics and cognitive semantics. The transferred epithet in the English language has traditionally been defined as a rhetorical device, that is, a specific type of hypallage of the adjective which is applied as a modifier to an inappropriate word in the sentence. Actually this seeming displacement of word order allowed for a logical interpretation has a stylistic effect that might put an emotional emphasis on the addresser's attitudes or environments. It is true that the peculiar phenomenon referred to as Transferred Epithet has been studied within the scope of literary stylistics, but today should it be required for some linguistic approaches to the phenomenon to clarify it on the basis of principles or logical deductions: pragmatics and cognitive semantics. According to the contemporary pragmatics, the incoherence of word order would be accessed by Grice's cooperative principles as well as understood by the addressee's inference. Turning to cognitive semantics, especially the contemporary studies in metonymy, they would give us a clue to understanding of the conceptual distance of a modifier from its target noun, the modifiee, which would lead to a collaborative work of the Construction Grammar with the Theory of Conceptual

Metaphor. In addition, the present writer suggests to foreign learners that a linguistic approach to the transferred epithet as such should enhance their language competence in commanding as well as comprehending the language concerned.

序

本稿は、以前から形容詞をめぐる英語文体の修辭的特徴として取り扱われてきた特異な句構造を形成する「転移修飾 (transferred epithet)」に焦点を当てて、その特徴を現代言語学の観点から明らかにすることと併せて、そうした試みが眞の英語理解と習得にとって有益であることを示唆するものである¹⁾。

かつて夏目漱石は、煩悶を繰り返した英国留学において、進化論の呪縛から解放された境地を「私は軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めることができた」と『私の個人主義』(学習院での講演録)の中で記したが、その英訳 the gloomy city of London の下線部もまた「転移修飾」と呼ばれる言語現象である。同様に一般的な事例として、I drank a hasty cup of tea. [= I drank a cup of tea hastily.] など指摘されることが多いが [柴田・藤井 (1985: 203)], そのような言語表現に関心を払うことなしには、英語圏のいわゆる一定水準の教養のある人々 (educated people) がもつ英語らしさを感じ得ることは到底望めないであろう。

また、最近再発見した英語文に This pleasure ..., and has nothing to do with any desperate need of your own. (B. Russell, *The Conquest of Happiness*, 1930) というものがあつたが、これも下線部は [with what you need desperately] と解釈するのが自然であろう。ただし、desperate need (死に物狂いの必要性) と聞いても、言語学者や辞書編纂者でもなければ、それほどまでに意味関係の違和感を覚えることのない卑近な例 (日常的複合語) も数多存在する—— their married life (⇔ *life is married)/ liberal education/ dead fence/ criminal court/ sick room/ the poor law 等、枚挙に暇がないが、よく観察してみると、修飾語と被修飾語 (名詞句の head) との意味的結合度合いに違いがあるようだ。

「転移修飾 (transferred epithet)」について、単なる英文学的修辭という視点からではなく、言語学的視点から、この特異な言語表現を捉え直し

た Robert Hall (1973) の洞察は看過できない。また、それを構文論として扱う黒田航 (2011) も示唆的内容に富む。加えて、最近の認知言語学的メタファー・メトニミー理論 (概念メタファー理論) からの分析も進んでいる。本稿では、そうした接近法を参考に「転移修飾」に迫ることにする。この趣の試みが、言語学習者の言語知識の増強につながる言語的洞察力を涵養することに直結すると考えられるからである。

転移修飾 (transferred epithet) の定義と実態

1. 一般的定義と特徴

英語学研究において、こうした修辭的事項に詳しい時代に編纂された『英語学辞典』(研究社) 及び『新英文法辞典』(三省堂) に依拠すれば、転移修飾とは「Hypallage [代換・転喩] の特殊なもので、英語では、いわば hypallage of the adjective —— 本来属すべき語から離れて、形式上他の語の修飾語として用いられた形容詞及びその用法」のことをいうと大括りで定義することはできる。しかし、安井 et al (1976: 176) の指摘では、事態はそれほど単純ではなく、「転位修飾語を、それが本来修飾すべき語のしかるべき位置にもどしさえすれば、それで万事解決するのかというと、そうでない場合が非常に多い」「非常に圧縮された表現であり、表面的な形式と意図されている意味との間には、いくつかの中間段階が介在している」複雑な言語現象として位置づけられる。

この言語表現の典型的事例は本稿序節において言及したように、“I had a hasty cup of tea.” のような構文だが、この“a hasty + N”構造を BNC100万語サンプル Corpus (BYU-BNC) で検索してみると、316例を確認することができた (hasty meals の出現頻度が高い) —— 文体的分類では、上位から、**Fiction** (134) / Newspaper (39) / Non-Acad (37) / Acad (31) / Magazine (15) / **Spoken** (2) 等 [() 内の数字は token 数]。この結果から、転移修飾は「極めて文語的・情緒的・強意的表現である」という傾向を看取することができ、当該表現に対して英語使用者が漠然と抱いている印象の正当性が具体例をもって証左される。

ここで、いくつか代表的な散文事例を提示しておく。

- (1) Her cheeks are streaming with tears./ What ignorant sin have I commit[t]ed?
(知らないうちに一体どんな罪を犯したのだろう)
(Shakespeare, *Othello*)
- (2) Let us speak our free hearts each to other.
(お互い心の内を自由に話そう) (Sh., *Macbeth*)
- (3) I led them on in this distracted fear.
(この恐怖の中に彼らを気も狂わんばかりと陥れた)
(Sh., *A Midsummer-Night's Dream*)
- (4) They had killed each other in their drunken wrath.²⁾
(彼らの酔いに任せた怒りで殺し合った)
(Stevenson, *Treasure Island*)

2. Hall (1973) の言語学的示唆

米国の言語学者 Robert Hall, Jr. (1911–1997)³⁾が言語学誌 *Linguistic Inquiry*, vol. 4 (1973) に Squibs & Discussion として発表した P. G. Wodehouse という作家における転移修飾に関する考察は、従来の修辭学的技法としての転移修飾を言語学的構文論として扱った示唆に富む論考であると考えられる。もっとも、それに60年も先行して Otto Jespersen (1860–1943) が文法的観点から転移修飾を *Modern English Grammar II* (1913) において、Shifted Adjunct の項で分析していることは指摘しておかねばならない。

Hall (1973) の指摘する Wodehouse からの典型的事例からいくつかを抜粋して例示する。

- (5) I balanced a thoughtful lump of sugar on the teaspoon.
⇔ I thoughtfully balanced a lump of .../ I was thoughtful, and I balanced a lump of sugar on the teaspoon.
- (6) He was now smoking a sad cigarette and waiting for the blow to fall.
⇔ He was now sadly smoking a cigarette and waiting for the blow to fall.

- (7) and though somebody had opened a tentative window or two, ...
⇨ and though somebody had opened a window or two tentatively,...
- (8) As I sat in the bath-tub, soaping a meditative foot ...
⇨ As I sat in the bath-tub, soaping a foot meditatively ...
- (9) ..., he slipped a remorseful five-pound note into the other's hand.
⇨ ..., he remorsefully slipped a five-pound note into the other's hand.
- (10) As he turned from waving a genial hand at the departing car ...
⇨ As he turned from genially waving a hand ...
- (11) The first thing he did was to prod Jeeves in the lower ribs with an uncouth forefinger.
⇨ ... to prod Jeeves in the lower ribs uncouthly with a forefinger.

これらの事例から、次の2つの分析が可能となる。

[分析1] We might interpret the adjective, in the constructions Adjective + Noun, as equivalent to an adverb transferred from its position modifying the verb of the clause.

(形容詞＋名詞構造において、当該の形容詞は節 / 文の述語動詞を修飾する位置にあった副詞が転移したものと等価であると解釈できる)

[Hall (1973: 93)]

[分析2] These [Adverb + Verb constructions], in their turn, involve a reference to the subject of the verb in each instance, ...

(副詞＋動詞構造がそれぞれの事例において動詞の主語に対する言及を含む⇨これを敷衍すれば、転移修飾も同様に主語指向性をもつという解釈を許す)

[Hall (1973: 93)]

特に [分析1] に基づく構文化現象について、構造主義的に形式化して示せば、He was sad. + He was smoking a cigarette. ⇒ He was sadly smoking a cigarette. ⇒ He was smoking a sad cigarette. となり、一連の生成段階を想定することができる。ここから意味論的に指摘できることは、この SVO という単純な文型のなかに2つの命題が共存し、二重判断が行なわれていることである⁴⁾。ここで改めて、安井 (1976: 176) の洞察に依拠するなら、転移修飾表現は非常に圧縮された表現形式であり、表面的

な形式と意図されている意味との間には複雑な過程が存在しているところに、その本質的特徴を見出すことができるということになる。

3. 英語類似構文との混成 (hybrid) の可能性

いわゆる軽動詞構文 (Light Verb Construction = Light Verb (have/take/make/give) + 不定冠詞 A + Noun [V-conversion type が多い: eg. look/ smile/ argument等]) との類似性を黒田 (2011) は指摘する。次の事例は黒田 (2011) に基づき、本稿筆者が修正したものである。

- (12) John had a close look at the document.
⇔ John looked at the document closely.
- (13) The princess gave him a grateful smile.
⇔ The princess smiled to him gratefully.
- (14) She had a harsh argument with her husband.
⇔ She quarreled with her husband harshly.

しかし、これらの場合には“look is close” “smile is grateful” “argument is harsh” という意味関係が容易に成立する点に、転移修飾のもつ「概念結合の距離感」とは異なる側面を看取することができる。而して、次の例文 (15) は二通りの意味解釈 (a / b) を許容する。

- (15) Kate took nice pictures.
⇔ a) Kate took pictures nicely.
⇔ b) The pictures Kate took are nice.

もっとも、黒田 (2011) の論考は、眞のイディオム (eg. kick the bucket) に対する理解と同様に、文の意味が、当該文を成す構成素の意味の綜合に拠らず、構文自体が意味を生むという文法観に立脚する、いわゆる「構文文法」⁵⁾が概念メタファー理論とどのように統合するのかについて、電子化コーパスを利用して数量的に実証しようと試みたものとして捉え直すと、極めて示唆的であることを指摘しておきたい。

4. 日本語表現の場合の特徴——大和ことば形容詞との関わり

Hall (1973) は次の Wodehouse 例文を提示することによって、転移修飾の高次元の機能として、それが文法的主語との直接的な関連性を持たせながらも、直近に関与する人物の抱いた感情に言及することを保持する技巧であることを評価している。

- (16) It was plain that I had shaken him. His eyes widened, and an astonished piece of toast fell from his grasp.

“bringing the transferred epithet into direct relation to the grammatical subject of the sentence, but preserving its reference to the emotions of the person immediately concerned”

[Hall (1973: 94)]

これは転移修飾のもつ著しく情緒的かつ感情的な効果を強調したものであると解することができるが、日本語の場合、大和ことば形容詞に立ち返って考えると⁶⁾、それは主に「情意」を表わすシク活用形容詞（美しく／麗しく／嬉しく／悲しく）が体言に係る修飾語として共起するのではないかと推測される。同じ形容詞でも、主に「状態」を表わすク活用形容詞（高く／広く／狭く／少なく）にはこの機能は能わずと考えられる。次の事例はいずれも黒田（2011）からの抜粋である。

- (17) 私は楽しい余暇を過ごす。
⇒私は楽しく余暇を過ごす。
- (18) 私は気持ちよいオフロードを走り抜ける。
⇒私はオフロードを気持ちよく走り抜ける。
- (18) *私は気持ちよい眼球を動かした。
⇒私は気持ちよく眼球を動かした。
- (19) 私はすばやい朝食をとる。
⇒私はすばやく朝食をとる。
- (19) *私はすばやい周囲を見回した。
⇒私はすばやく周囲を見回した。
- (20) *私はすでに深い彼女を愛していた。
⇒私はすでに彼女を深く愛していた。

転移修飾 (transferred epithet) の機能

1. Stylistics Approach (文体論的攻究)

それではいったい何のために転移修飾は使われるのか。従来から英文解釈法として定評のある佐々木高政『[改訂] 英文解釈考』では次のような英文を例示して、「形容詞の転位」に関する文体論的効果についての説明を試みる。

- (21) If she heard of a theft, a divorce, even worse things, she would knit puzzled brows and think how utterly wretched the offenders must have been ...

(盗み、夫婦別れ、いやもっとおぞましい事件の噂を聞くと、彼女は当惑の眉根をよせ…)
(D. L. Sayers, *Gaudy Night*)

「she would *knit puzzled brows* のところに目を留めると、これは *she would look puzzled, knitting her brows* などとして印象の分散の危険を冒さぬため、*puzzled* をからだの一部である *brows* につけていることがわかる。*brows* そのものは *puzzled* という心理作用を営むわけではなく、その *brows* の持主である *she* がやるのであるが、*puzzled* を *brows* につけると読者におやと思わせ、その注意をそこに引くことができる。そして印象が統一され、生き生きとしてくる。」

[佐々木 (1980: 176)]

残念ながら、佐々木 (1980) では転移修飾 (同書では「転位形容詞」) の起源については不明とするものの、転移修飾について、①本体からその一部 (特にその所作) へ転位させるものと、②本体から離れた別のもの (主として時間・空間を表わす語に身体的・心理的状态を記述する形式) へ転位させる 2 種類の修辞技法に分類記述している——①の事例の典型としては、“She flung up her defiant chin.” ⇔ She flung up her chin defiantly. や “He shrugged a somewhat disdainful shoulder.” ⇔ He shrugged his shoulder, putting some disdain into the gesture. (S. Maughm, *Then and Now*) 等があり、②の事例の典型としては、“He stared at me for some uncomfortable seconds, his face harsh with ...” ⇔ He stared at me for

some seconds, leaving me uncomfortable, his face harsh with ... や
“Throughout the busy summer days, the workbees toil ...” ⇔ Through-
out the summer days when they are at their busiest, the workbees toil
... 等がある。

また、転移修飾が散文より韻文に多いという事実に鑑みると、次のよう
に、文体論的效果 (stylistic effect) に焦点が当てられた伝統的な解説も
首肯できるものである。

「…詩の言葉が意味の連絡性 (coherence) をできるだけ減じようと
する傾向をもつためであろう。普通の二次的要素を普通の形式で一
次的要素に添えるときは、構文の連絡は容易であり、意味は明瞭で
ある。これが散文の目的とするところである。しかし詩は意味の統
一性 (unity) と志向性 (intentionality) を重んじる。たとえば一
次的要素にそれと意味上十分連絡しない二次的要素が添えられた場
合、それを理解するためには、二次的要素とうまく連絡するような
別の一次的要素や事物を文脈の中あるいは外に求めなければならない。
この努力が構文の志向性を増すことになるのであるが、それは
連絡性を犠牲にして得られたものであると言えよう。」

[佐々木 (1955: 56)]

2. Pragmatics Approach (語用論的攻究)

前項で掲載した佐々木 (1955) の主張を文学的脈絡から言語学的脈絡
に置換して、その語用論的效果 (pragmatical effect) の面から説明すれば、
次のようになる。

まず、表層的にはおよそ関連性がないと思われる修飾語と被修飾語によ
り構成された名詞句を話し手 (あるいは書き手) が提示することにより、
聞き手 (あるいは読み手) に「意味の結束性 (semantic coherence) の破
壊」が行なわれていると感じさせる。ここでいう「意味の結束性
(semantic coherence) の破壊」というのは、今や語用論 (pragmatics)
の古典的研究ともいうべき Paul Grice (1913–1988)⁷⁾ の「会話の含意
(conversational implicature)」を措定するための「協調の原理 (co-
operative principle)」とそれを構成する「4つの公理 (four maxims)」

に着目することで説明することができる。我々の日常的言語活動を支配する「協調の原理」には、それが機能するための下位規則（哲学用語では格率）と見なされる「量の公理 (Maxim of Quantity)」「質の公理 (Maxim of Quality)」「関係の公理 (Maxim of Relation)」「様態の公理 (Maxim of Manner)」が過不足なく働くことが肝要であるが、名詞句における「意味の結束性の破壊」が認めれた場合には、表層的には「関係の公理 (=Make your contribution relevant)」や「様態の公理 (=Be perspicuous)」が破られて、一見ナンセンスな語の結合（例えば、colorless green ideas のような名詞句産出）が行なわれていると聞き手（あるいは読み手）には感じられる。しかし、次の段階で、発話者（あるいは作家）が破壊的ともいべき非意思伝達行為に出ているのではなく、何らかのメッセージを伝えようとしていることに聴者（あるいは読者）に確信が生じ、その前提に立つならば——すなわち、協調の原理は遵守されていると想定するならば、おのずから下位の4つの公理も遵守されているということになる。そこで、第三段階としては、聞き手（あるいは読み手）は「推論 (inference)」を働かせ、当該名詞句を含む発話（あるいは文）が産出された場面 (context) を頭の中で再構築して、実は関連性のある語を連結した意味のある名詞句であり、何らかの意図があって明瞭な言い方を故意に避けたものだと解釈する。これにより、「意味の結束性の破壊」を感じさせた発話者（あるいは作家）の発話内行為 (illocutionary act) は有意義なものとなる——すなわち、結果として、発話者の意図を高めること (to enhance speaker's intention/ intentionality) につながるからである。

このようにして、前項で指摘したような（従来から盛んに行なわれてきた）英文解釈の過程は、発話者の視点の置き方と動きを正確に捉える能力——換言すれば、発話文 (text) の背景にある脈絡 (context) を再構築して、発話の意図を読み解く能力 (語感) を涵養することに寄与する。転移される距離が遠ければ遠いほど、発話者の意図は高められて、それを解釈する側の英語使用者の能力も洗練され、結果的に向上する。

3. Cognitive-Semantics Approach (認知意味論的攻究)

転移修飾を最近の認知言語学研究のメタファー・メトニミー理論（概念メタファー理論⁸⁾）で捕捉しようとする試みが山本（2008）にあることは指摘しておかねばならない。

山本 (2008) は換喩 (metonymy) の一環で転移修飾を分析する。ただし、同氏の場合、メトニミーはラネカー (Ronald W. Langacker, 1942-) の視点を活かした「参照点構造」で説明され、一般的な「隣接性」では説明されない点に特徴がある。同氏は転移現象を「言語表現が、本来説明すべき表現から離れて関わりのある他の表現を修飾する現象」と定義づけたうえで、「意味の2層構造をもつ非自立型メトニミー」であると結論づけ、4類型に分類する。

「1層目の意味：言語表現の伝達内容は、〈(拡張された)全体〉としての〈関与対象〉についての修飾要素による説明である。」

「2層目の意味：修飾要素が直接関係するのは対象の〈部分〉(関連概念)としての〈関与者〉である。」 [山本 (2008: 212)]

この理論を当てはめると、例文 (10) *As he turned from waving a genial hand at the departing car ...* ほどのように説明できるのであろうか。同氏によれば、第II型 (表出型=身体部位を修飾する) に分類され、第1層の意味は [言語表現の伝達内容は、関与者“he”の関与対象“hand”の状態についての修飾要素“genial”による説明] であり、第2層の意味は [修飾要素“genial”と直接関係するのは、関与対象“hand”の〈関連概念〉である関与者“he”である] という解釈プロセスを可能にする。

しかし、それとは対照的に、第I型 (投影型) に分類されるであろう漱石の「私は軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めることができた」を同じ手法で説明するのは少々苦しい。第2層の意味解釈プロセスにおいて、[修飾要素“陰鬱な”と直接関係するのは、関与対象“倫敦”の〈関連概念〉である関与者“私”である] という時に、“倫敦”の関連概念が“私”であることが理解されるためには、いわゆる「百科事典的知識」の共有を聞き手に要求するのだが、それは例文 (10) の場合と異なり、それほど容易なことではない。しかし、それにもかかわらず、陰鬱な倫敦や幸福な結婚生活といった語句は日常的に使用され、他方、身体部位であるため、かえって関連概念までの連想距離の近い“a genial hand”のほうが特異な表現形式として使用される理由に対して、この意味解釈プロセスの説明が十分な説得力をもつとは言い難い。

従って、一般的な「隣接性」に依拠した、メトニミーをめぐる認知意味

論的アプローチで転移修飾の説明が可能かどうかを再検討する必要があると思われるが、それについては回を改めて論じたい。

結 語

転移修飾 (transferred epithet) を著述家が使う単なる文体論的技巧と考えれば、その理解力は特殊な場合に限定される文学的色彩の濃い修飾的言語能力に関わる問題であろう。しかし、それを日常的言語生活に現われる語用論的手法あるいは認知意味論的手法と考えれば、その理解力は、より一般性をもったコミュニケーション能力 (communicative competence) 及び認知能力 (cognitive ability) の一部を形成する言語学的色彩の濃い修飾的言語能力に関わる問題ということになる。

本稿では、後者の立場を支持することにより、転移修飾という特異な言語現象を文学的かつ文体論的的技巧として、単純化かつ矮小化して理解する従来の硬直した枠組みから英語学習者を解放した。すなわち、現代言語学の知識を活用した語用論的かつ認知意味論的観点からの考究を試みることにより、転移修飾を含む一連の英語構文に対する理解度を深め、そうした構文に習熟することが言語使用者の語感を洗練かつ向上させることに寄与することを示唆した。

最後に、認知意味論における概念メタファー理論を適用した転移修飾の分析にはさらなる考察が必要であろう。また、転移修飾が「誰かが何かの折にふとやっつてしまい、それが次第に語義、語法の拡大につながり、表現の可能性を増したのであろう」[佐々木(1980: 176)] という指摘が正鵠を射たものであるかどうかについて、歴史的観点から転移修飾の発達・推移を検証することも今後の課題として残したことを附言しておきたい。

註

- 1) 転移修飾 (transferred epithet) に関する考察を広義の Rhetoric 研究の一環として捉えたものに拙稿「転移修飾 (Transferred Epithet) — 語感と構文」[大学英语教育学会 (JACET) 第29回中部支部大会シンポジウム「レトリック研究から見えてくる英語習得／教育への洞察」発表稿：『JACET 中部支部紀要』第11号 (2013) 所収] があり、本稿の内容は一部それと重

複するところがある。

- 2) この英文は各種の文法辞典や文法解説書に引用されるが、Robert Louis Stevenson (1883) *Treasure Island* のどの箇所からなののかについてはまったく指摘がない。本稿筆者の調査によれば、これは同書 Chap. 25: 第8段落の記述に基づく。また、同書 Chap. 31: 第12段落には“the drunken folly of the pirates”という表現も看取できる。
- 3) Robert Anderson Hall, Jr. (1911-1997) は米国の言語学者兼ロマンス語学者であり、本文中に言及した作家に関わる The Wodehouse Society (US) の初代会長でもある。日本人研究者とはコーネル大学教授時代に接触が多かったと思われるが、戦後ガリオア資金でコーネル大学に留学した故鳥居次好教授が静岡大学で同僚であった興津達朗教授と共訳した『記述言語学入門』*Linguistics and Your Language* (1950/1960²) の原著者としても知られている。
- 4) Anton Marty (1847-1914) の言語哲学に基づく「二重判断」について詳しくは、中島文雄『意味論』(1939) 参照のこと。
- 5) Adele E. Goldberg 等の提唱する構文文法 (Construction Grammar) では、文法を慣習化された構文の集合体としてとらえる。文法を語彙項目とそれを合成する規則によって記述する生成文法とは対照的な言語観を形成している。
- 6) 日本語の古語 (大和ことば) の形容詞にク活用形容詞とシク活用形容詞の二種類があることについては大野晋 (2002: 129-30) 参照のこと。
- 7) Herbert Paul Grice (1913-1988) は英国出身の言語哲学者であり、米国カリフォルニア大学バークレー校で教授を務めた。J. L. Austin (1911-1960) の流れを汲み、日常的言語活動について、含意 (implicature) の理論に依拠した“intention-based semantics”を考究した。同氏著書 *Studies in the Way of Words* (1989) で理論の全体像を知ることができる。
- 8) George Lakoff & Mark Johnson を中心とするメタファー・メトニミー理論 (概念メタファー理論) 研究は従来、修辞技法 (文体論) の問題と見なされてきた隠喩 (metaphor) を、単なる文章構成技巧ではなく、人間の基本的な認知能力の一つ「概念メタファー」であると捉え直し、認知意味論の基礎を成した。隠喩と同様に、換喩 (metonymy) や提喩 (synecdoche) の分析もまた認知意味論の中心的課題である。

参考文献

- Hall, Robert (1973) “The Transferred Epithet in P. G. Wodehouse,” *Linguistic Inquiry* 4-1.

- Jespersen, Otto (1913) *A Modern English Grammar on Historical Principles* II. London: George Allen & Unwin.
- 市河三喜 [編] (1953) 『英語学辞典 [増補版]』東京：研究社.
- 池上嘉彦・河上誓作, 他 [訳] (1993) 『認知意味論』東京：紀伊國屋書店. (orig. George Lakoff, *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press, 1987)
- 河上誓作, 他 [訳] (2001) 『構文文法論』東京：研究社. (orig. Adele Goldberg, *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, 1995)
- 黒田 航 (2011) 「転移修飾を構文交替として特徴づける」(第166回メビウス研究会資料) [URL] <http://www.hi.h.kyotou.ac.jp/~kkuroda/papers/on-transferred-epithets-slides.pdf>
- 卷下吉夫・瀬戸賢一 (1997) 『文化と発想とレトリック』(中右実 [編] 日英語比較選書1) 東京：研究社.
- 中島文雄 (1939) 『意味論—文法の原理—』東京：研究社.
- 大野 晋 (2002) 『日本語の教室』東京：岩波書店.
- 大塚高信 [編] (1970) 『新英文法辞典 [改訂増補版]』東京：三省堂.
- 小川佐太郎 (1954) 『形容詞』(英文法シリーズ8) 東京：研究社.
- 佐々木高政 (1980) 『[新訂] 英文解釈考』東京：金子書房.
- 佐々木達 (1955) 『近代英詩の表現』東京：研究社.
- 佐藤信夫, 他 (2006) 『レトリック事典』東京：大修館書店.
- 柴田徹士・藤井治彦 (1985) 『英語再入門』東京：南雲堂.
- 安井 稔, 他 (1976) 『形容詞』(現代の英文法7) 東京：研究社.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』東京：くろしお出版.
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論』東京：大修館書店.
- 山本幸一 (2008) 「第10章 転移修飾現象の分析—非自立型メトニミーとしての分析」『メトニミーの認知言語学的研究』(学術博士論文 [名古屋大学大学院国際言語文化研究科])